

## 美術を“好き”にするために(3)

### —幼児教育を学ぶ人への造形指導—

## 木俣 創志

### 1. はじめに

子どもの頃は夢中で「かく・つくる」をしていた人が、なぜ、そしてどのような経緯でそれをしなくなってしまうのか。そんな素朴な疑問に対する答探しをしていくことが、今の日本で美術の授業を良くしていくために有益なことではないでしょうか。

「継続という力」といったテーマには、こつこつ刻苦勉励するイメージがありますが、私は、授業によってその科目が“好き”になった場合の「その後の人生への持続的な影響力」ということを考えます。成長し大人になってからも、ずっと美術に親しむ姿です。

とくに小中高の一般教育での美術授業は、美術に不向きな人を選び分ける“ふるい”ではないはずです。平均寿命が著しく延びた今日、そもそも美術の授業は、ふるいではなく、長い人生において望めばいつでも美術に親しめるような素地をつくる、その土壌を耕す“くわ”の様な重要な役割があるのではないのでしょうか。



### 2. 美術・造形への苦手意識

なぜそう考えるようになったか—

私は25年以上にわたり、幼児教育を学ぶ人への造形指導の現場で仕事をしてきました。今も進行中です。

現場では、学生さんの約半数が造形に苦手意識を抱いているかのような“伝統”がありますが(註)、おそらく、その現実をどのように受けとめるかで個々の教員の授業スタイル、授業方針、授業の個性が決まります。

私の場合、両親の運営する美術・造形教室に毎日のように入り浸りて過ごし、美術への苦手意識が無かったためか、幼児教育を学ぶ学生さんのこうした現実にはすぐには気づきませんでした。しかし、毎年の授業アンケートによって美術・造形に対する苦手意識の赤裸な実態を知るに及び、自身の授業スタイルを真摯に問い直した経緯があります。

私は、幼稚園や保育園、小学校にはアートを専門とする教諭や保育士さんが必ずいるべきとの考えです。が、それが叶わないとしても、幼児教育を学ぶ学生さんには、ぜひ良質のくわによって耕された良質の畑となって子どもを育ててほしい、これは子どもを預ける親たちの願いでもあるはずです。

私の授業スタイルは未だ研究の途上ですし、時代の変化にともない学生さんの意識変化の激しい昨今、今後完成をみるということもないでしょう。しかし現在、ともかく授業では美術の面白さをこころから体験してもらい、かつ将来の実践指導に役立つように、といった二本柱で授業をしています。

こころからの面白さの体験。それが、“美術好き”へと繋がってゆけば、将来、彼ら彼女らの造形指導にとっても、これ以上の学習効果は望むべくもないでしょう。さらに当人ばかりでなく、“美術好き”が次代の子どもたちにも受け継がれることにより、まさしく「継続という力」として自然な文化の伝承となるのではないのでしょうか。

### 3. 教員は2つのことだけすればいい

授業が「ふるい」ではなく「くわ」となるためには、学生さんが美術を好きになるよう導いていくこと。

このシンプルな授業目的の重要性を、私は繰り返し述べてきました。また、これを抜きに今の私の美術・造形指導はあり得ず、したがって、指導現場において第一に大切なことであると考えています。

美術を“好き”にさえしてしまえば、学生さんのハートに芽生えた“好き”という感情によって、美術教育をめぐる個々に拡散したままの様々な問題—研究誌、学会誌等に散見される諸問題—が、一人ひとりの人間の成長過程でまさしくクリエイティヴに解消、統合されてゆく現実を目の当たりにしてきました。“美術が好き”という感情が、いわば接着剤のような働きをし、活きた力となって自力で制作上の様々な難題の解決を促していく、

そのような力を影で支えることこそ、私たち教員の仕事なのでしょう。

そのための具体的な方策はいくつか発表してきました。そこで今回は、別の切り口で述べたいと思います。

“美術を好き”にするために教員がすることは二つだけではないか。

そのひとつは、**具体的な指導をなるべくしないこと**、そして二つ目は、**学生さんとの会話を面倒がらず常にコミュニケーションをとること**、ではないかと思っています。



#### 4. 教員から具体的な指導をなるべくしない

ひとつは、「あなたの作品の、ここはこうすべき」というような美術教師からの**具体的な指導をなるべくしないこと**です。

この言い方が誤解を与えるなら、「教員サイドからのアクションとしての指導は控える」ということでしょうか。勿論、質問・相談されたときのリアクションは除き、ということですが、これについては次章で述べます。

端的に言えば、事前に**知識と環境の充実**が図られればよいと思っています。

知識面の充実について述べれば、私は制作前の課題説明とは別に余分に時間をさき、必要な**知識**はあらかじめレクチャーします。

例えば、美しい配色の仕方、構成法、絵具や粘土の種別がなぜ存在するか、接着剤と接着テープの上手な使い分け、危険な用具…など。また、壁面構成がなぜ必要(不必要?)か、パソコンの描画ソフトで絵の訓練は代替できるか、あるいは、そもそもなぜ美術が人間にとって必要か、などラディカルな深いテーマも折りをみて話します。

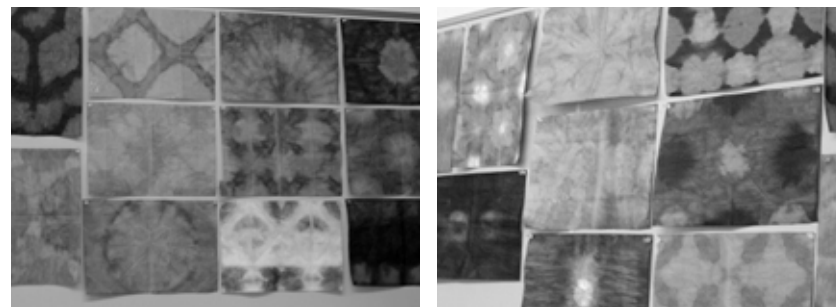
これらをコンパクトかつ学生さんの思索を促すよう伝えるには、教員も自身の専門である美術に対する見識、造詣、スキル、個人的な熱い思いが問われ、さらに言葉の陶冶を必要とすることは言うまでもありません。

そして「なぜ美術は人間にとって必要か」といったおしまい問いに対する無言の回答となるよう、**環境面の充実**も大切ではないでしょうか。

眼をみはるような、もしくは人を心地よくし、疲労した心を癒すようなセンスのよい作品の展示空間を思い浮かべる方も多いかもかもしれません。あるいは、繁盛している画材店などでの造形道具のディスプレイなども大いに参考になると思います。制作したくなる衝動に火をつける空間、とでも言えばよいのでしょうか。

このほか、例えば、(諸般の事情はあるにしても)美術の道具を学校から家に持ち帰って洗浄させるなどの面倒な状況を改めたり—これは至極あたりまえのことですが—、用具が常備され自由に使用できる環境を整える、などの配慮があればと思います。

さらに、学生さんが段階を踏んで自然に制作に打ち込めるよう周到に組まれたカリキュラムなども、制作環境の一部として捉えることができるかもしれません。



#### 5. 学生との会話を面倒がらない

もうひとつは、**学生さんとのコミュニケーション、会話を面倒がらない**ということです。「今さら」と思う方々もいるかもしれませんが、例えば、私たちが病気に苦しむとき、患者の質問に面倒くさそうに対応するお医者さんをたいへん不安に思うでしょう。あらためて述べるまでもありませんが、いわゆるインフォームド・コンセントの語がすでに私たちの間に定着しているにもかかわらず、情報のやりとりを面倒がるお医者さんが世の中に少なからず存在するのも事実です。

事の本質は同様であり、私たち美術の教員もまた、個々の学生さんの作品に常に眼差しを注ぎ、その制作状況について、いつどのような事を質問・相談されてもよいよう、また、適切な気づきを促せるよう、学生さんとの対話に万全を期したいと思っています。

(唐突ですが、私は、今の日本で使われている共通語より関西弁を共通語にしたほうが意思の疎通がはるかにしやすかったのではないかと、いつも考えます。意思疎通に不必要な角張った言い回しなどがなく、“発しやすく受けとめ易い”からです。)

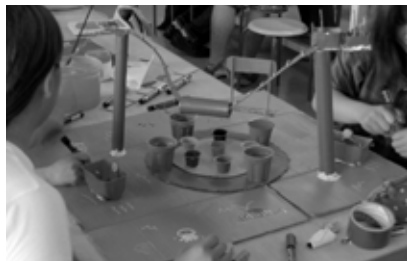
それはともかくとして、学生さんと教員がいつでもキャッチボールできるようなフレンドリーな信頼関係を築きさえすれば、学生さんは困っているときに、気軽に質問してきます。「この色をどうしても絵の具で作れない」とか、完成を目前に「自分の作品には何か足りない」とか…。

そして、質問を受けた際—これは教員の力量にかかっているのかもしれませんが—様々な“正答”を提示した上で、さらにほかの“正答”の可能性もあることも示唆したらよいと思います。これは、私たちが制作する場合、まずは様々な可能性を思い描き、そのなかから最もフィットするものを選択・収斂してゆき、さらに別の可能性を探っていくシステムをシミュレーションすればよいのでしょう。

かつて学生さんの寄せてくれたアンケートのコメントに「なんでも質問できて楽しい」というのがありました。学生さんは、良かれ悪しかれ指導者に対する信頼感を前提にして授業に打ち込みます。ゆえに、教員との信頼関係が堅固であればあるほど—とくに意識の高い学生さんは—多少厳しい指導にも安心してついてきます。

昨今の授業アンケートの教員側のコメントには、「質問の少なさ」に溜め息をもらすものも多いですが、学生さんに妙な気遣いをされないよう、まずは気軽に話せる雰囲気、と考えています。

総じて昨今の学生さんには、作品への深い感動経験や、目の前で絵を描いてみせたり、自由に色をコントロールしてみせたり…など、教員の美術に対する見識、造詣、スキル、個人的な熱い思い、を適宜示していく必要を感じています。



## 6. おわりに

教員から具体的な指導をなるべくしない、そして、学生さんとの会話を面倒がらない、この2つさえ励行すれば、子どもの頃に夢中で「かく・つくる」をしていた空間が再び蘇るのではないか、そんな思いから以上述べてみました。

この小論は、サブタイトルにも示してあるとおり、主に（美術を専門としない）幼児教育を志望する大学課程での造形指導の現場経験にもとづいています。

もとよりこの方法が、幼児教育を志望する学生さんのための造形授業のあらゆる局面に適切である、などという考えはありませんが、一方で、高校の美術授業などでも充分に通用する内容ではないかと考えています。

その理由は、一般に、若年層ほど作品への具体的な指導を嫌がり、高齢者ほどそれを求める傾向があるからです。

（これは、幼児から高齢者まで幅広い年齢層に、長年、美術指導してきた経験則です。その事実に着目して理由を考えてゆくと、子どもの頃は夢中で「かく・つくる」をしていた人が、なぜ、そしてどのような経緯でそれをしなくなってしまうか。冒頭のこの問いに対する答のひとつに辿り着くのですが、別の機会とします。）

加えて、今後さらにダイヴァシティが求められる時代です。様々な学生さんの大きな振れ幅を考慮した場合、教える側の有限な美的判断基準は、ときに若い感性と衝突するであろう姿勢で授業に臨むべきです。またそうした衝突が起きた場合、様々な問題を生み出してしまう事例も見聞しています。

とはいえ、若さゆえに美術の基本が疎かになりがちな若年層には、要するに「基本はしっかり伝え、自力で制作・展開させ、制作中の具体的な作品へのコメントは控える」といった指導法が適切であろうと考えるのです。

そのためには、指導スキルもさることながら、総じて私たち教員と美術との結びつき、結びつき方が大きく問われます。そして、当然ではありますが、これは教育学会に何回足を運んでいるとかということとはまったく関係がありません。

多くの美術作品をどれだけ見聞しているか、そして、吸収・応用・研磨したテクニックのみならず、それらの作品からどれだけ感動と癒しと畏怖とを得、自身のうちに血肉化しているか。さらに、自身の制作からどれだけ充実を得ているか—。

そうした教員自身と美術との結びつきが、紛れも無く、毎回の授業で常問われていると考えるのです。

画家

静岡英和学院大学 昭和女子大学

非常勤講師（美術・造形）



#### 註

幼児教育を学ぶ課程における美術・造形への苦手意識を指摘する声は、枚挙に暇がありません。実態の詳細について、近年では、降旗孝による素晴らしい研究がありますので、興味のある方は是非こちらを参照して下さい。降旗孝著『図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察—児童・生徒・大学生への実態調査結果から—』山形大学紀要(教育科学)第16巻第2号別冊2015年。

また、苦手意識を克服する試みとしては、宮越敏夫による興味深い研究がありますので、こちらも是非どうぞ。宮越敏夫著『美術を苦手とする学生の苦手意識克服の為の試み』新潟青陵大学短期大学部研究報告第41号2011年。

この小論は、拙論「美術を“好き”にするために(1)(2)—幼児教育を学ぶ人への造形指導—」(「美」195号、196号)の続編ですが、内容は独立した一編となっています。

掲載写真は、学生さんの制作風景(授業風景)、展示作品、制作発表会、などです。